

明石の君物語についての一考察

— 第一部 を 中心 に —

武 原 弘

明石の君の物語の実質上の始発は、源氏とはじめての出会いを描く「明石」巻であるが、彼女の物語初登場は、はやく「若紫」巻に先行するところとなっている。

瘧病み療養のため北山に赴いた源氏を慰めようと、供人良清が座興として聞かせる短いエピソードのなかに、「世のひがもの」(若紫・二七七頁) 前播磨守明石入道とそのいつき娘のことが語られる。もともと、彼は名門出身の高官であったが、自ら望んで受領となり、そのまま辺地に身を没して新発意となった。一門再興を願って、娘を都の貴人に縁づけるべく、その将来に異常なまでの期待をかけ、代々の国司たちの求婚をも拒絶し続けているという。その「心高き」(同・二七八頁) を、供人たちは笑止のきわみと聞き捨てたが、源氏は

……ただならず思したり。かやうにても、なべてならず、もてひがみたること好みたまふ御心なれば、御耳とどまらむをや、

(若紫・二八九頁)

明石の君物語についての一考察 — 第一部を中心に —

と、強い関心を示した。この叙述は、さきの「雨夜の品定め」の条で性格づけられていた彼の「あやにく」の「癖」(帚木・一三〇頁)を語り展べる文脈のなかに置いて読まれるものであるが、さらには、「源氏は、この娘のことをただ世間話として軽く聞き流しはしなかつたというのである。須磨・明石の伏縁」と解されてよい。すなわち、「若紫」巻初頭の段階で、作者はすでに「明石」巻以降に展開する明石の君物語を構想のなかに組み入れていたと解することができるのである。

源氏と少女紫の上との出会いを主想とする「若紫」巻にエピソードとして点描されて始められる明石の君物語とは、いかなる主題と方法によるものなのであろうか。

「若紫」巻と「明石」巻との構想上のつながりは、必ずしも自明的なものではない。明石入道が娘への期待を源氏に語る条に、

住吉の神を頼みはじめたてまつりて、この十八年になりはべりぬ。

(明石・二三四—三五頁)

との叙述があり、娘の年令は十八才と考えられているが、それから九年さかのぼる「若紫」巻で彼女はすでに代々の国司などの求婚の

対象になつていて、年令的に不自然だからである。藤井貞和氏によると、「この十八年」は、娘が生まれたときに願を立てて以来の意ではなく、入道が播磨に下つてきて住吉を信仰しはじめて以来の意なので、ここでの娘の年令は二十才〜二十二才ぐらいとしてよいといふ。従えば、「若紫」巻での彼女の年令は十一才〜十三才ぐらいとなるが、それにしても「代々の」国司たちの求婚の対象としては若すぎるようである。他方では、「あとあとから見れば、やはりこの時（「明石」巻の時点で「引用者注」十八才ぐらいと思われる）（玉上琢弥氏）ので、両巻における娘の年令上の矛盾は解消できない。つまりは、いずれの巻においても、「源氏にふさわしい妙令の女性を登場させるといふ局面の必要性から、前後の統一を無視した」叙述例とするのが、もっとも妥当な解釈であろう。重要なのは、作者は当初から、明石の君の年令を紫の上のそれとほぼ似かよつたところに措定し、出自をまったく異にする両者を対比的に描くことによつて

源氏の「好色」世界より深い追求をもくろみつつある点である。その意味において、「若紫」巻における明石父娘の話は、単なるエピソード以上の重みをもつもので、「明石」巻以降の展開部での源氏をめぐる明石の君、紫の上の緊張関係が、結果としてそのことを証することになるのである。

源氏と明石の君との契りは、靈妙な住吉の神意に導かれた「宿世」の必然であったが、その直後に源氏が思い悩むのは、都に彼を恋い待っている紫の上のことである。

二条の君の、風の伝てにても漏り聞きたまはむことは、戯れにても心の隔てありけると思ひうとまれたてまつらんは、心苦し

う恥つかしう、（中略）とり返さまほしう、人のありさまを見たまふにつけても、恋しさの慰さむ方なければ、

（明石・二四八―九頁）

と、明石の君と紫上に心を分けた源氏に、後悔と恋情とが交錯する。紫の上に対する思いやりから、源氏の明石の君訪問も一時的には間遠になるが、召還の宣旨が下つてからは再び夜離れなく通うので、所詮は「例の御癖」（明石・二五三頁）が正体の、彼の「好色」が明瞭となつているのである。懐妊した明石の君を残して帰京した源氏は、やがて姫君誕生の報を受けて、紫の上と明石の君とのすべてを語らなければならなかつた。源氏の弁解めいた告白を聞きながら、紫の上は

すさびにても心を分けたまひけむよ、とただならず思ひつつけたまひて、我は我と、うち背きながめて、

（濡標・二八二頁）

と、嫉妬の情を隠さない。源氏がすすめる琴に「手も触れたまはず」（同・二八三頁）すねるのも、明石の君が琴の名手であることを聞かされているためである。物語の作者は、このような源氏の「あやなきすさび事」（明石・二四八）に、紫の上が、これまでも「さすがにとどめて恨みたまへりしをり」（同）と、嫉妬してきたことをことさら補足して言うが、これまでの物語にそのような事実が描かれたことはなく、ここで源氏を中にしての明石の君と紫の上の緊張関係がいかに深いものであるかを強調しようとする表現の一環として、それは詭まれるべきなのであろう。また、「濡標」巻で、明石の君が女子を生んだことを知った源氏は、宿曜の勘申「御

子三人、帝、后必ず並びて生まれたまふべし。」(濔標・二七五頁)との予言が実現したことを悟る。物語はここで、紫の上には源氏の子が生まれないことを確定したことになるが、それはまた、子の有無によつてはどう変化するやも測り知れない源氏の愛情、ひいてはその妻としての地位をめぐる紫の上と明石の君との確執をも、ここで読者が予想しうる文脈とも読める。かくて、物語は紫の上―源氏―明石の君の三角関係を基本構図としてきているかに見える。

が、作者は明石の君に、低い入わが身のほどを徹底的に認識、自覚して生きる高い人格性を賦与することによつて、その物語の構図を変容、昇華させていくのである。この点についての詳考は後節に譲るとして、ここで私が注意しなかったのは、上述のごとく、明石の君の物語は、当初から紫の上物語と密接不離の競合関係にあり、したがって明石の君の人物造型もまた、紫の上との確執を可能態の物語として踏まえるところから始められている点である。藤井貞和氏が説くとおり、「明石の君は、紫の上と、二極をなして張りあう構想で源氏物語のなかに置かれてゆく」^(註6)のである。

「若紫」巻で、明石入道を「大臣の後」とし、前「近衛中将」として(二七五頁)、その一族を高貴の出自にあるものと語り出してゐるのは、後で明石の君が上洛して源氏や紫の上にとって身近な存在となり、緊密な人間関係に入っていく物語の構想上の、作者の周到な用意なのである。父入道については、「故母御息所は、おのがをぢにものしたまひし按察大納言のむすめ」(須磨・二〇二―三頁)

との叙述で源氏との血縁が語られ、母尼君については、「昔、母君の御祖父、中務宮と聞こえける」(松風・三八八頁)との叙述で出自

明石の君物語についての一考察 ―第一部を中心に―

の尊貴が語り継がれ、それらに支えられてはじめて明石の君が辺境の浦から京の大堰の山荘の夫人となることができた。これら一連の叙述群は、その長大な明石の君物語の構想を充足していく細部叙述^{ディテール}として、場面の要所に有効適切に敷設されたものであることを読みとりたい。

あるいはまた、「この思ひおきつる、宿世違はば、海に入りぬ」(若紫・二七八頁)との入道の「遺言」(同)が、後の諸巻において、「かくながら見捨てはべりなば、浪の中にもまじり失せぬ」とな^ん掟てはべる」(明石・二三五頁)や、「さらばその遺言なりな」(若紫上・一一九頁)という同様の表現によつて承けられているのも、それは単に同じ語句の反復表現とする以上に、明石の君物語の構想上の緻密な統一性、一貫性を証するものなのである。

このようにして、物語の一方において進展しつつある源氏と紫の上の相愛相思の世界のなかに明石の君を組み入れながら、作者は豊かな構想のもとに明石の君物語を展開しようとしているのであるが、そうした物語構想および状況設定によつて、作者は明石の君の人物像をいかなるものに造型し、またその物語の主題をいかなるものとして追求するのであるか。上洛前後の明石の君の動静を追いながら、考察をすすめる。

二

姫君誕生の後、明石の君にとっては、いっそう「数ならぬ身」(濔標・二八七頁)を歎くことが多かったが、願ほどきのために「世の中ゆすりて」(同・二九二頁)住吉に参詣した源氏一行と偶然に行き

違い、その華やかな行列を遠望した彼女は、いよいよ徹底的に「もの思ひ添はりて、明け暮れ口惜しき身」(同・二九八頁)を痛歎することとなった。源氏の再三にわたる上洛招請に、彼女は「なほわが身のほどを思ひ知る」(松風・三八七頁)一方で、姫君の将来を考えては思い乱れる。親の説得もあって、思案の果てに上京を決意した明石の君に、予想どおり、源氏の訪問は間遠にしかない。紫の上の執拗な嫉妬のためである。「例の、心とけず見えたまへど」(同・四一二頁)、「文は広がりながらあれど、女君見たまはぬやうなるを」(同)と、嫉妬心を抑えきれない紫の上と、大堰の山荘で八身のほどVを敷きつつ孤影を深める明石の君の間で、源氏は苦慮するのである。姫君を養女として引き取るうとの提案を、「いとようかなひぬべくなん」(同・四一三頁)と紫の上が快諾するので、ここでの三者の緊張関係は破局を回避することになるが、この場面の描写は、「児をわりなうらうたきものにしたまふ」(同)母性愛豊かな紫の上の人格を強調するかに見えて、その実、姫君を引き取ることによってライバル明石の君より優位に立とうとする紫の上の対抗意識のしたたかさも暗示するのである。明石の君にとっては、さらに苛酷な試練が迫り来つつある。

ここで、身分の格差を思ふなら、紫の上がこれほど明石の君に嫉妬するのは当たらないと考えることができる。源氏自らが教えて言うように、

なすらひならぬほどを思しくらぶるも、わるきわざなめり。我は我と思ひなしたまへ。(松風・四一二頁)

と考量して、冷静にふるまう余裕が紫の上にはあつたはずで、事実、

彼女の嫉妬ぶりもさほど激烈ではなく、源氏の目には「なかなか愛敬つきて」(落標・二八三頁)見えてもいた。が、その後も絶えない源氏の大堰訪問を、「女君ただならず見たてまつり送りましたまふ」(薄雲・四二九頁)のであり、明石の君はやはり悔り難いライバルであつた。その理由は、明石の君が

やむごとなき人々などに劣るけぢめこよなからず、容貌、用意あらまほしうねびまさりゆく。(薄雲・四三〇頁)

ので、源氏に対しても

過ぎたりと思すばかりの事はし出せず、また、いたく卑下せずなどして、御心おきてにもて違ふことなく、いとめやすくぞありける。(同・四三一頁)

と、ますます理想的な魅力を発揮する女性だったからである。「身のほどにはややうち過ぎ、ものの心などえ」(朝顔・四八三頁)た女性で、ここよりはずつと後の巻において、源氏は明石の君の人柄をほめ、

何ばかりのほどならずと侮りそめて、心やすきものに思ひしを、なほ心の底見え、際なく深きところある人になむ。うはべは人になびき、おいらかに見えながら、うちとけぬ気色下に籠りて、そこはかとなく恥づかしきところこそあれ。(若菜下・二〇一頁)

といっている。

このようにすぐれた人格に心ひかれて、源氏が「人のほどなどはさてもあるべきを」(薄雲・四三〇頁)と思量するとき、明石の君は、その身分や格を超えて、紫の上とまさに対すべきライバルであ

ったのである。源氏をめぐる紫の上と明石の君との三角関係の構図のなかに、作者は、身分や地位を超え、あるいはそれを侵して深化する信愛、純粹に人格と人格で切り結ばれる男女の眞の愛情の探求という主題を追いはじめていたのである。

これまで作者は、明石の君に対して、地の文で敬語待遇による表現を施すことはなかったが、「松風」巻で、姫君の将来を思うが故に故郷を捨てて出京する場面を描くに至って、

いきてまたあひ見むことをいつとてかかぎりもしうぬ世をば
たのまむ

送りにだに と切にのたまへど、(三九四頁)

と、はじめに尊敬語による待遇を示し、同巻ではかに三例、続く「薄雲」巻で、源氏に姫君を引き渡す場面に見える。

姫君は、何心もなく、御車に乗らむことを急ぎたまふ。寄せたる所に、母君みづから抱きて出でたまへり。(四二四―四五頁)

の用例を含めて、前後に五例の敬語表現が認められる。玉上琢弥氏が指摘するように、「明石の君が明石の姫君の母君と意識されるときは敬語が現わされるらしい」ことは確実で、そうした敬語の漸増が、明石の君の地位の上昇と密接したものであることも明瞭となり、ここで、「物語の世界における彼女の相対的位置の明確な画定が、敬語の微妙な用法と必然的な関係をもって表現されている」とする秋山虔氏の卓説が想起される。ただ、注意を要するのは、明石の君に対する敬語表現は、前後の文脈においてなお可動的で、とくに彼女が紫の上と対比的に描かれる場面においては、無敬語による待遇がふたたび優先すると見られる点である。たとえば、姫君入内の際、

明石の君物語についての一考察 ―第一部を中心に―

明石の君をその後見役に推そうと考える紫の上の心中描写は、「かの人もものしと思ひ嘆かるらむ」(藤裏葉・四四〇頁)と、無敬語表になっており、兩人の対面では、

ものなどうち言ひたるけはひなど、むべこそはと、めざましう
見たまふ。またいと気高う盛りなる御けしきを、かたみにめで
たしと見て、…定まりたまひけるも、いと道理と思ひ知らるる
に、…と思ふものから、出でたまふ儀式のいとことによそほし
く……(同・四四三頁)

と、それぞれに対する待遇表現の差異が顕著となって、明石の君の「さすがなる身のほど」(同)が強調されている。それでも、彼女が紫の上から離れて姫君を見る場面に移ると、「この母君かくてさぶらひたまふを」(同・四四四頁)、「あらまほしうもてなしきこえたまへれば」(同)と、ふたたび敬語表現を復活させる。すなわち、姫君の生母として、母性愛に満ちてしかも聡明な明石の君の高い人格に対する作者の敬意は、物語に不動不変のものであったと読みとることができる。物語の世界において、とりわけ紫の上との比較において、敬語待遇の対象とならない明石の君が、同じ文脈のなかで同時に作者から敬意をもって待遇される存在でありえた理由とは、ひっきりや、身分や地位を超えて人格の内実を追求してやまない作者の人間観の破格的表明として解析されるべきものなのである。その意味において、明石の君にかかわる敬語叙述は、単に場面的描写的であるよりも、もっと構造的表現的なのである。

ともあれ、「数ならぬ身のほど」を徹底的に認識、自覚して、忍従の「宿世」を生きぬく明石の君は、その高い人格性をもって、対

極にいた紫の上とともに源氏の「好色」^{すき}世界を支えた女性であると言えよう。両者はいかにも対称的で、すぐれたライバル同志でもあった。かつて島津久基氏が説いたごとく、「紫は全一的で自然で単純で明るく、明石は二元的で努力家で複雑で重苦しいと概して言へよう。此の「理想」と「現実」との作者の各々の姿、「斯くありたき」自身と「斯くある」自身との対比を、源氏物語中の最も主要な両女性の上に看出す^{註6)}のである。作者が、源氏をめぐる三角関係の構図を通して描出したかったのは、そのような紫の上像、あるいは明石の君像なのであつたらうと、私にも考えられるのである。

三

姫君の将来のためとはいえ、愛児を手放す明石の君の苦悩と悲歎は大きかった。姫君を抱いて箕子まで出ても、生身を裂かれるようになつらさに堪えられず泣きくすれる彼女の姿には、拙い「身のほど」を極限まで生きたる女の悲哀と、いかなる自己犠牲によつても子を守る崇高な母性愛が流露して、場面も人物も、確かで豊かな形象を得たものとなっている。

末遠きふたばの松にひきわかれいつか木だかきかげを見るべ

き

えも言ひやらすいみじう泣けば……(薄雲・四二四頁)

詠歌に秀でいた明石の君がまたもなす離別の詠唱は、いま絶唱といつてよく、これ以後の物語では影をひそめている。

こうして、二条院に引き取られた姫君は、紫の上によくなじみ、紫の上もまた「いみじうつくしきもの得たり」(薄雲・四二六頁)

といつくしむので、明石の君も淋しきは消し去れないものの、安心を得つつある。ここで注意されるのは、紫の上の、源氏あるいは明石の君に対する態度の変化で、

女君も、今はことに怨じきこえたまはず、うつくしき人に罪ゆるしきこえたまへり。(同・四二七頁)

と、これまでのような嫉妬を示さなくなる。生来子供好きで、鷹揚な性格だったとも知られるのだが、明石の君よりも優位の立場にある養母としての自分の位置が確認できたのと、情愛豊かな女性として源氏の信愛を得ようとする懸命の努力とも、それは考えられもしよう。明石の君もまた、いっそう「身のほど」をわかまえて、分を越えて礼を失するような行動はとらず、源氏にも紫の上にも遠慮深く対応するので、三者の関係は調和安定したものとなっていくのである。

阿部秋生氏の明石の君論によると、「光源氏の物語五十四帖中の人物としては、姫君を紫の上に譲ってしまったところで、彼女の主要人物としての役はすんでしまったことになる」^{註6)}ようである。実際、「薄雲」巻以後の物語本文をたどつてみても、明石の君が登場するのは、「朝顔」巻で源氏が紫の上に語る女人批評の一節「この数にもあらずおとしめたまふ山里の人こそは……」(四八三頁)、「少女」巻末で描かれる六条院への入居場面(七七頁)、あるいは「螢」巻で、絵物語に熱中する玉鬘と交わす物語論の枕の部分「明石の御方は、さやうのこともよしありてしなしたまひて……」(二〇二頁)などわずか数か所で、「藤裏葉」巻における姫君入内の場面ではさすがにやや重い後見役として再登場する程度である。ふた

たび阿部氏の論を引けば、「その後（「薄雲」巻以降―引用者注）の彼女は、源氏の生活を飾る特異な存在として、源氏の生活描写の中に点景的に時折登場するだけである。八年たつて、姫君が東宮の後宮に入る時になつても、この人物は、すでに物語を推進する骨格的人物としての地位はとつてゐない」^{註四}のである。氏はさらに、第二部「若菜上」巻以降における明石の君の変貌について論及されるのであるが、本稿では第一部の範囲に限つて、彼女の人物像の変化、その役割や意義について考察することにした。

さきにも述べたように、姫君を養女に引き取つてからは、紫の上の嫉妬心も柔らぎ、それまでのライバル意識にとらわれた緊張関係が克服されつつあるように読みとられる。それは、源氏の妻妾として、紫の上も明石の君もそれぞれの地位を安定されつつあることを意味している。宿禰の勸申によつて、源氏は将来国母となるはずの姫君の宿運を知らされをおり（濠標・二七五頁）、読者もまたそれを予告されているので、紫の上と明石の君との確執はそろそろ解消されるべく、物語の新展開が期待されてもいたであらう。つまり、姫君を引き取られた時点で、明石の君はもはや、源氏の本妻である紫の上に対抗して、その地位に揺さぶりをかける存在ではありえなくなつたのであり、またその必要もなくなつたのである。姫君の将来が榮華に満ちたものであればあるほど、その生母としての明石の君の将来の地位も輝やかしいものだからである。これまで、紫の上に対して侮り難い脅威の存在であつた明石の君の役割は、ここでほぼ完了したと読んでさしつかえなく、彼女に代つてそうした役割を担つて登場するのが朝顔の姫君なのであるが、作者の視点は紫の

明石の君物語についての一考察 ―第一部を中心に―

上の内界に置かれていて、朝顔の姫君の世界はほとんど深まりを見せないまま、物語はさらに多様な展開の相を示すことになるのである。

「少女」巻で、造営成つた六条院に、秋好中宮や紫の上や花散里と並んで、明石の君が堂々と入居するのも注意されてよい。

大堰の御方は、かう方々の御うつろひ定まりて、数ならぬ人は、いつとなく紛らはさむと思つて、神無月になん渡りたまひける。御しつらひ、事のありさま劣らずして、渡したてまつりたまふ。姫君の御ためを思せば、おほかたの作法も、けぢめこよなからず、いともものしくもてなさせたまへり。

（少女・七七頁）

「数ならぬ人」と卑下はしているが、他の貴夫人と「ありさま劣らずして」、格式高い作法によつて迎え入れられている。地の文における敬語によつて、ここでの彼女の高い地位が印象づけられ、さらに「渡したてまつり」という源氏からの謙讓語敬意による待遇を受けて、そのことが強調されてもいる。

顧るに、明石の姫君が誕生したとき、源氏は二条の東院を改築して母子を迎え入れようと計画した。が、「身のほど」を恥じる明石の君は上京を渋り、やつと決意して上落したものの、人目をさけるように大堰の山荘に入居した。源氏の再三のすすめにもかかわらず、彼女は二条の東院への移転を執拗に拒み続けたので、せめて姫君だけでもという源氏の要請のなから、養女問題は具体化したのである。その状況において示された謙遜卑下の態度こそが、「身のほど」を知つて明石の君自らを選びとつた処世倫理であつたはずなのであ

るが、その彼女がなんらの躊躇もなく、あっさり六条院入りを果している。物語としては、もちろん、将来の国母姫君の生母のため
の状況設定が進みつつあると読める。が、明石の君自身は宿曜の
予言を聞かされてはいないはずで、ここで源氏の処遇を素直に受け
入れるおちついた明石の君像がほの見えているのは、阿部氏の説く
「明石の君の変貌」が、すでにはじまっているのであろうか。ある
いは、六条院の建物そのものが、彼女をそのように貴夫人然たらし
めたのであろうか。

源氏の二条の東院構想が中途で挫折し、それに代る六条院構想が
実現に至る間の問題点についてはすでに諸論があり、本稿の主旨に
もはずれるので詳考しないが、故六条御息所への鎮魂のために、六
条院は「六条京極のわたりに、中宮の御旧き宮のほとり」（少女・
七〇頁）に造営されなければならなかつたとする藤井貞和氏の説
が注目される。明石の浦から帰京した源氏が、まず訪問して見舞つ
たのは御息所であり、そのとき彼女は、娘齋宮を「世づいたる筋に」
（濡標・三〇一頁）ではなく源氏に託して、逝去する。源氏は、そ
の遺言を守るべく娘の処遇について考慮をはらうが、内心ひそかに
「好色」心も動いており、二条の自邸に迎えとろうかと考えたりし
た末、藤壺入道と謀って、冷泉帝への入内を決定する。梅壺に局し
た女御は、やがて中宮に冊立され、源氏も太政大臣に昇進するに及
んで、いまの榮華を故御息所に報ずる気持から、秋好中宮の里内裏
ともいふべき、あるいは自身の王権の象徴たるべき六条院の造営を
思いついた源氏なのである。そこは、みやびの粋を集め、王者源氏
の威徳が輝く「生ける仏の御国」（初音・一三七頁）であった。そ

の六条院に、最後の順番ではあるが、明石の君が自明のごとくに移
に住むのは、六条御息所との関係によるのではないかと考えられる
一面もある。源氏をはじめて明石の君に逢った場面に、

ほのかなるけはひ、伊勢の御息所にいとようおぼえたり。何心
もなくうちとけていたりけるを、（中略）人さまいとあてにそ
びえて、心恥づかしきはひぞしたる。（明石・二四七頁）

との叙述があつて、この二人の人柄がよく以通つてることが描か
れている。前記したように、明石一族の家系はもともと高貴で、六
条御息所のそれと比べても同レベルのものであつたと推察すること
ができる。御息所と明石の君が同時に源氏の愛を受けていることが
なかつたこと、御息所の怨霊が明石の君には現われなかつたことな
ど、二人の関係を詳細に分析した坂本和子氏は、「或いは入道の父
大臣と御息所の父大臣との間に、又中務宮も含めて、血縁につなが
る関係を想定して、その中から、御息所と明石上とが源氏の妻の座
を継承する関係を設定したかもしれない」と論じている。物語本文
に書かれていない事からなので確証は得ないが、仮説としてはなり
たつてあろう。そうだとすれば、明石の君が六条院に堂々と入居し、
秋好中宮ほかの貴夫人に比肩して劣らぬ地位を画定される必然性
も、姫君の将来の問題に加えて、いつそう強大であつたことにな
る。いづれにしても、六条院に移つた明石の君には、それまで彼女
に固有の「数ならぬ身」への強烈な認識と自覚が稀薄となつてい
ることは確かである。そして、それが「卑下と忍従という意識的な自
己否定の努力」の結果であるという意味において、この物語におけ
る彼女の役割が完結しているとする読みも、おそらくは正当なので

ある。

「藤裏葉」巻において、念願かない、姫君が東宮へ入内する。明石の君は、姫君の実母の立場を重んじられ、後見役として参内する。紫の上とも初めて対面し、その「いと気高う盛りなる御けしき」(同・四四二頁)を見て感服し、対する自身の「かうまで立ち並びきこゆる契り」(同)を、あらためて嬉しく思うのである。「これもうちとけぬるはじめなり」(同)の「これ」が具体的になにを指すのかについては諸説あるものの、この叙述には、以降の物語における紫の上と明石の君との、円満な人間関係による六条院での幸福が暗示されている。

いま宮中で、娘の晴れ姿に感涙をとどめえない明石の君の姿を描く作者の筆致には、これまでの物語において造型してきた明石の君像の集約結収の意がこめられているようである。

年ごろよろづに嘆き沈み、さまざまうき身と思ひ屈しつる命も延べまほしう、はればれしきにつけて、まことに住吉の神もおろかならず思ひ知らる。(同)

思えば、転変曲折の半生ではあった。源氏との偶然の契りが機縁となつて、父に生別し、故郷を捨て、愛児をライバルに奪われるという苛酷な運命が彼女の身にたどられたのであるが、それを己が「宿世」として正面から受けとめ、いつの時でも聡明さと強靱な意志力をもつて世に処してきた結果としての、いまの彼女の幸福であつて、「身のほど」を思い知るが故に彼女がたえなければならなかつた苦悩と悲歎に対する、それは作者の代償でもあるのに相違ない。その人柄は秀抜で、

明石の君物語についての一考察 — 第一部を中心に —

いどみたまへる御方々の人などは、この母君のかくてさぶらひたまふを、暇に言ひなしなどすれど、それに消たるべくもあらざ、いまめかしう、並びなきことをば、さらにもいはず、心にくくよしある御けはひを、はかなき事につけても、あらまほしうもてなしきこえたまへれば、殿上人なども、めづらしきいとみ所にて、

(同・四四四)

と、最高度に賛美されている。地の文で、作者が敬語による待遇を示すのも、当然とすべきであらう。紫の上との仲も理想的で、うちとけるといっても、態度をくずすことはなく、

さりとしてさし過ぎもの馴れず、侮らはしかるべきもてなし、はた、つゆなく、あやしくあらまほしき人のありさま心ばへなり。(同)

と、明石の上の高い人格性が強調されている。このようにして、明石の君物語におけるひとつの完結を読み解くことができるのである。

明石の君物語については、他方において、貴種流離譚^{註(1)}、靈験譚^{註(2)}の視座からのアプローチが欠かせないのであるが、先学^{註(3)}に導かれて、別の機会に考察を施すことにしたい。

註(1) 『日本古典文学全集源氏物語(1)』頭註による。

(2) 池田亀鑑氏『源氏物語事典』のなかの稲賀敬二氏による「年立」ほか。通説と考えてよい。

(3) 藤井貞和氏「うたの挫折—明石の君試論—」(『古代文学

論叢第七輯「昭54、紫式部学会編所収」『細流抄』には、
やく問題提起がなされている。により、巻名と頁数を記した。

- (4) 玉上琢弥氏「源氏物語評釈第三卷」(昭40、角川書店)
- (5) 『日本古典文学全集源氏物語(2)』の頭註による。
- (6) 註(3)に同じ。
- (7) 玉上琢弥氏「敬語の文学的考察」(『源氏物語研究』昭41、角川書店所収)
- (8) 秋山虔氏「上代・中古の風俗と敬語生活」(『敬語講座2』昭48、明治書院所収)
- (9) 島津久基氏「源氏物語新考」(昭11、明治書院所収)
- (10) 小町谷照彦氏「歌一独詠と贈答明石君物語に即して」(『国文学』昭47・12)また註(3)参照。
- (11) 阿部秋生氏「源氏物語研究序説」(昭34、東京大学出版)の第二篇第五章。
- (12) 註(1)に同じ。
- (13) 藤井貞和氏「源氏物語の始原と現在」(昭47、三一書房)
- (14) 坂本和子氏「光源氏の系譜」(『国学院雑誌』昭50・12)
- (15) 今井源衛氏「源氏物語の研究」(昭56、改訂版未来社)
- (16) 註(1)の書で、阿部氏は須磨・明石に古代伝承物語の中にある貴種流離譚の話型を認めつつも、それを作者がどの程度意識していたか、疑問のひとつとしている。
- (17) 柳井滋氏「源氏物語と靈験譚の交渉」(『古代文学論叢第一輯』昭44、紫式部学会編所収)は示唆に富んでいる。

なお、本文の引用は「日本古典文学全集源氏物語」(小学館刊)